

富山県生協、福島県の被災地訪問

2013年11月21日、22日、富山県生協の役職員・組合員の計19人は、福島県をバスで訪れ、コープふくしまの案内で相馬市、南相馬市、浪江町、新地町などを巡り、被災地の現状を自分の目で確かめました。

●コープふくしまの案内で被災地域へ

11月21日。朝5時半にバスで富山県を出発した富山県生協の役職員・組合員は、福島駅にてコープふくしまの宍戸義広常務、古瀬聡子理事、山田佳奈理事と合流し、福島県の津波被災地、東京電力福島第一原発事故の被災地へ向かいました。

バス車内で宍戸常務から、放射能や避難指示区域についての説明を受け、これから訪問する場所がどのような場所であるのか、放射線とは何であるかを全員で共有しました。

川俣町、飯館村を経由するバスの車窓から、一行は被災地域の様子を目に焼き付けました。仮設の小学校、道路わきに並ぶ除染廃棄物が詰められた袋、建設中の除染廃棄物仮置き場の様子。参加者は、目に焼き付けていました。また、車内では、飯館村は原発事故当初は避難対象地域でなかったこと、11年4月10日頃までは「安全だ」と説明されていたにも関わらず、突然「計画的避難区域」（1カ月以内に避難）に指定され強制避難させられたことなどが宍戸常務より説明されました。

このあと向かった南相馬市では、南相馬道の駅にて、現地の組合員理事である渡邊洋子さんと合流しました。ここは、原発事故の影響で店舗が閉店し、買い物が困難になっていた南相馬市の住民にお役立ちするために、全国の生協の協力のもと、11年4月2日にコープふくしまが開催した「頑張るぞ、南相馬市（みなみそうまいち）」の会場となったところです。一行はさらにバスを南へと進め、浪江町へと向かいました。



バスの車窓から見た、道路わきに並んだ除染廃棄物が詰められた袋の山。

●時が止まった町、浪江町

浪江町は、13年4月に警戒区域・計画的避難区域がとかれ、避難指示解除準備区域となった一部の地域（それ以外は、居住制限区域・帰還困難区域に分かれ、現在も立ち入り禁止）が、日中のみ立ち入りが許可されています。津波被災地域の積み重なるがれきの山を、参加者たちはじっと見つめていました。訪問企画を行なった次の週からは、がれきの撤去作業が始まるので、バスなど大型車両の立ち入りは、しばらくの間禁止されるということです。

津波被災地にある献花台に花をたむけたあと、浪江駅を訪れました。浪江駅は津波の被害は受けませんでしたが、原発事故で強制避難をしたこと



津波被災地にある献花台へ、花を捧げる富山県生協の皆さん。

を物語る物がたくさん残されていました。「地震発生のため、終日運転を見合わせます」と書かれた駅の案内掲示、自転車置き場に整然と並べられたままの自転車、駅前の新聞配達所には、「県内震度6強 死者16人」と大きく見出しに書かれた、恐らく3月12日の朝配られるはずであったろう新聞が山積みになっていました。信号機だけが点滅し、それ以外は、動くものの気配すらしないような、11年3月11日から時が止まったような町の様子に、参加者は言葉を失っていました。

浪江町を出る際、町によるスクリーニングを受け、放射性物質が検出されないかを確認したのち、一行は、小高区、鹿島地区、磯部地区、岩の子地区と、津波の被害を受けた地域を巡り、渡邊理事、古瀬理事の震災当時体験されたお話を聞きながら、相馬市の岩の子地区にあるホテル「晴風荘」に向かいました。いつでも逃げられるように車に米を積んで、ガソリンを満タンにして待機していたこと、外出していいか不安だったこと、避難所をたらいまわしにされ宮城まで行かされた方の話、いわき市まで食料が届かず共同購入のセンターに助けを求めたこと、物が買えない恐怖心があったこと、各地の生協は年度末の厳しい状態の中、欠品させてまで被災地に商品を届けてくれ、そうしたことは生協にしかできないと感じたこと。そういった話を聴きながら、車窓にも目を向けると、まだ住むことができない場所に新築の家が建っており、住めないけれども同じ場所に戻りたいという地域の方の思いが胸につきさりました。

宿泊場所である晴風荘は、津波の被害を受けながらも、11年中には営業を再開しました。隣の旅館は廃業し、周りにあった建物も、津波の被害を受け更地となっており、そのあとにはすすきが背高く生い茂っていました。晴風荘のおかみさんは明るく、津波が来た当時の記憶を語ってくださり、参加者は「どこまで津波が来たのですか」など熱心に質問をしていました。

翌日は、「原発事故による放射能汚染に向き合っ」をテーマに学びました。福島県を襲った津波の映像を見たり、コープふくしまがこれまで取り組んできた放射能学習会やガラスバッジによる外部被ばく測定サービス、実際の食事に含まれる放射性物質量の測定についてなどの説明を受けました。

また、昼は相馬市塚田区仮設店舗の直売・コミュニティスペース「報徳庵」でお昼ご飯をいただきながら、報徳庵を運営する「NPO法人 相馬はらがま朝市クラブ」理事長の高橋永真さんに相馬市の復興に向けた具体的な活動についてお話を伺いました。水産業で成り立ってきた地域だからこそ水産業の復興がなければ地域の復興もないこと、水産業復興の第一歩として県外魚介類を利用した加工品を作り報徳庵や全国で販売をしていること、若い人が戻ってくる明るい町をつくるために、土日曜朝市の開催やりヤカ一行商「海援隊」の活動を行なっていること……。「報徳庵を新しい相馬をつくる拠点にしたい」と力強く話す高橋さんの姿に、参加者は心を打たれた様子でした。

この訪問をきっかけに、富山県生協は地元に戻ってすぐ、宅配事業で「相馬はらがま朝市クラブ」



新聞配達所の室内に、震災発生翌日の3月12日の新聞がいまだ山積みになっている。



「福島県の被災地訪問」に参加した富山県生協の役員・組合員の皆さんとコープふくしまの皆さん。

の海産加工品を供給できるよう検討を開始。今後の取り扱いに向けて一步を踏み出しました。

●来て、交流して、考えることが支援

これら企画は、宿泊場所も含め、富山県生協 ネットワーク部 組合員活動グループの松本亮祐さんがコープふくしまと調整をしながら計画しました。その思いを松本さんは、こう語ります。

「現地の人の話を聞きながら、事実を知ること、そして、今立っているこの場所で、多くの人が亡くなったという事実を受け止めてほしいです。事実を見て、そこから組合員一人ひとりができることを考える。生協の職員ができることはあくまでそのサポートです。富山県生協としての支援スタンスを明確にしながら、生協として何ができるか、どうサポートできるか考えていきたいと思いません。今回の訪問は、昨年に引き続き2回目ですが、事実を知り、できることを考えるために年1度は福島のを継続的に訪れたいと思っています」。

参加した組合員は、今回の訪問について、「現地の方のお話を聞く機会が多く、それが大変良かったです。衝撃的なことも直接聞くことができ、ああ本当にそんなことがあったのだと分かりました」「交流会やおいしい食事など、楽しいことも現地の方と一緒にできて良かったです。重たい気持ちで帰るのかと思っていたら、人とのふれあいで元気をもらえました」「昨年来たときと変わっている部分と、全然変わっていない部分とを見ることができました」といった感想が聞かれ、充実した訪問企画になったことが伺えました。

2日目には、富山県生協の組合員が独自に企画して、バルーンアートのプレゼントをしたり、バスの中で募金を集めたりと、訪問を通して感じたこと、そして受け入れへの感謝の気持ちを行動に移している姿が印象的でした。

コープふくしまの宍戸常務は、「今後の支援を考えたときに、やはり、まずは、現状を分かってもらうことが一番だと考えています。現状を分かっただけであれば自ずと今後につながっていくと思います。今後の福島が向かっていかなければいけない課題の一つに、仮設住宅に住んでいる人の自立があります。帰還できないことで気力をなくすのではなく、そこからどのように一步一步前進していくかをサポートしていきたい」と話していました。



富山県生協の組合員（右2人）が、作成したバルーンアートをコープふくしまの皆さんにプレゼント。